



しまだ 敏 さん (海老ヶ島)

みんなが助け合い、手間ひまをかけて作り上げた行事だったのだと改めて感じました。

海青会（坪松栄会長）は、地域交流の場を作り、地域活性化を目的とするボランティア団体で、海老ヶ島地区の20歳から60歳の有志が集まって活動をしています。現在、約40人

海青会の活動

明野地区の冬の風物詩といえ、どんど焼きです。どんど焼きは小正月（1月15日ごろ）に地域の人が集まり、だるまや正月飾り、古いお札などを燃やし、その火を囲んで、篠竹に刺したお餅を焼いて食べ、無病息災を願う行事です。明野地区海老ヶ島では、自治会、海青会、子ども会が中心となり、毎年どんど焼きを行っています。今回はみんなで守り続けるどんど焼きを紹介します。

どんど焼き

みんなで守り続ける冬の行事

の会員で、廃品回収や子ども会と連携したお祭りのお囃子などの指導やイベントの協力を行っています。

どんど焼きの櫓組み立て

櫓は、まず中心部に太い柱を立て、その周りに竹を組んで骨組みを作ります。次に藁縄で締め付けながら、近くで刈り取った茅と、地区の五所神社で総代のみなさんが集めた落ち葉と一緒に巻き付けます。最後に太い柱の先端にだるまを取り付けて完成です。海青会会員にはトラックを持っていく人や高所作業ができる人などさまざまな職業の人がいるので、たくさんの機材を持ち寄り、みんなで力を合わせて作業します。

三世交代のどんど焼き

古くから受け継がれてきた海老ヶ島のどんど焼きについて、坪松会長にお話を伺いました。
「近年、地域内でも人と人とが顔を合わせる機会が少なくなってきましたが、どんど焼きは、子どもから年寄りまで地域の三世交代ででき



る、ふるさとのお祭りの一つで、海老ヶ島には欠かせない冬の行事です」と話します。点火当日は、海老ヶ島上第一・上第二自治会、そして子ども会のみなさんが協力してくれるそうです。お母さんたちはコロツケやお餅を準備し、自治会長が近隣の事業所を回って、協力を呼びかけてくれます。「海青会だけでは、できることが限られてしまいます。みんなが助け合い、コロナ感染症に負けず、海老ヶ島という地域を盛り上げていきたいです」と話す坪松会長の地域を思う気持ちが伝わりました。

取材を終えて

小学生のころ、どんど焼きに行き、真っ暗な冬の夜に、霜の降り始めた田んぼの中を近所の同級生たちと一緒に、はしゃぎ回ったことを思い出しました。地域のイベントに参加した思い出は、色あせることなく、一人ひとりの心の中に刻まれます。私たちの住むふるさとの温かさはこのように作られ、次世代に伝わってきたのだなと気づかされました。

少子高齢化でふるさとの行事が続々と廃止されている中で、ふるさとの温もりを絶やさないためにも、次世代に伝統や行事を伝えていってもらえるよう、今後も海青会のみなさんの活躍を期待しています。



どんど焼きの櫓を組み立てた海青会のみなさん